

浅川扇状地遺跡群

## 二ツ宮遺跡(3)

—はなのみ本社工場建設工事 地点—

## 浅川端遺跡(3)

—吉田2丁目宅地造成 地点—

2008年3月

長野市教育委員会

## 序

中央高地の北部、千曲川下流域に広がる善光寺平のほぼ中央に位置する長野市には、旧石器時代から現在に至るまで先人達が記した足跡が数多く残されています。これらは現在700箇所を超える埋蔵文化財包蔵地として周知されており、郷土の歴史や文化を理解する上で欠かすことのできない貴重な資料となっています。長野市ではこうした埋蔵文化財の保護・保存に努めていますが、現代社会においては交通網の整備や宅地造成などの開発行為により多くの埋蔵文化財が破壊され、消滅していることも抗いがたい事実であります。そこで現状保存が困難な遺跡については、発掘調査による記録保存という形で後世に伝えていく手段がとられています。

ここに長野市の埋蔵文化財第122集として上梓いたします本書は、民間開発事業に伴い、平成19年度に実施された二ツ宮遺跡と浅川端遺跡の発掘調査の成果をまとめたものです。両遺跡は、飯縄山を水源とする浅川により形成された浅川扇状地上に展開する大規模な集落遺跡であり、過去の調査では貴重な遺構・遺物が発見されています。今回の調査は比較的小規模なものではありますが、それぞれ多大な成果を得ることができました。連続と綴られてきた人々の歴史の一端を垣間見たに過ぎませんが、地域史解明の一助として多くの皆様にご活用いただければこの上ない喜びであります。

最後になりましたが、事業主体である有限会社はのみ、ジェイエイながのサービス株式会社をはじめ関係各位におかれましては、埋蔵文化財保護に対してご理解とご協力をいただき、発掘調査の実施に多大なご尽力を賜りましたことを厚く御礼申し上げます。

平成20年3月

長野市教育委員会  
教育長 立岩 陸秀

## 例 言

- 1 本書は、宅地造成等開発事業に伴い平成19年度に実施した、浅川扇状地遺跡群ニッ宮遺跡・浅川端遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。各遺跡の調査報告書を合冊とし、「長野市の埋蔵文化財」第122集として刊行するものである。
- 2 各遺跡の発掘調査は、事業主体と長野市長との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結して実施し、調査業務は長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）が履行した。事業主体及び「起因事業」は次の通りである。  
ニッ宮遺跡：有限会社 はなのみ 「はなのみ本社工場建設工事」  
浅川端遺跡：ジェイエイながのサービス株式会社 「(仮称) 吉田2丁目宅地造成工事」
- 3 本書の編集及び執筆は各調査における調査員が担当し、各報告書の例言にその分担を記した。
- 4 本書における資料提示の要領は下記の通りである。
  - ・ 遺構実測図における座標・標高は平面直角座標系の第Ⅴ系（日本測地系2000）の座標値と日本水準原点の標高を基準としている。
  - ・ 実測図における縮尺は、原則として遺構：1/80、土器：1/4、拓本：1/3に統一し、例外を含めて図中に明記した。なお、土器実測図中の網掛けは赤色塗彩を表している。
  - ・ 遺構の名称として、竪穴住居：S B、掘立柱建物：S T、溝：S D、土坑：S Kという略号を用いる。
- 5 出土遺物及び調査の諸記録は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。

長野市教育委員会埋蔵文化財センター担当による発掘調査の遂行においては、多くの方々のご支援をいただいている。発掘調査事業の委託者である有限会社はなのみ並びにジェイエイながのサービス株式会社の関係各位におかれては、埋蔵文化財保護に対する深いご理解に基づき、円滑に調査事業が実施できるようご配慮を賜った。深甚なる謝意を表するものである。また、発掘調査期間中には稲田・吉田地区の関係各位より絶大なるご支援・ご協力を賜った。厚く御礼申しあげたい。

浅川扇状地遺跡群

# 二ツ宮遺跡(3)

—はなのみ本社工場建設工事 地点—

2008年3月

長野市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、有限会社はなのみによる「はなのみ本社工場建設工事」に伴い実施された、二ツ宮遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は長野市榑田3丁目1841に所在する。
- 3 発掘調査は、有限会社はなのみ 代表取締役 小宮慶洋と長野市長 鷲澤正一との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結して実施した。調査業務は長野市教育委員会（埋蔵文化財センター担当）が履行した。
- 4 発掘調査は平成19年4月23日～5月1日までの期間で実施した。調査面積は250㎡である。
- 5 本書の編集及び執筆は長瀬出が担当した。
- 6 遺構写真は長瀬、遺物写真は小池勝典が撮影した。
- 7 出土遺物及び調査の諸記録は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。なお、遺物注記や諸記録標題としての遺跡略記号は「AFM-H」を用いた。

## 目 次

### 例言・目次

第1章 調査経過	3	第2節 歴史的環境	6
第1節 調査に至る経過	3	第Ⅲ章 調査成果	9
第2節 発掘調査の経過	4	第1節 調査概要	9
第3節 調査体制	4	第2節 遺構と遺物	13
第Ⅱ章 遺跡の立地と環境	5	第Ⅳ章 結語	16
第1節 地理的環境	5		

## 図 版 目 次

図1 二ツ宮遺跡の位置	3	図8 2号土坑	13
図2 調査地周辺の地形	5	図9 4号土坑	13
図3 周辺の遺跡	7	図10 8号土坑	14
図4 基本土層柱状図	9	図11 出土土器実測図・拓影図	15
図5 遺構分布図	10	表1 遺構一覧表	12
図6 調査区の位置と遺構分布	11	表2 出土土器観察表	16
図7 1号溝	13		

# 第 I 章 調査経過

## 第 1 節 調査に至る経過

当該発掘調査は、長野市稲田3丁目1841他において有限会社はなのみが計画した「はなのみ本社工場建設工事」を起因事業とする。発掘調査実施に至るまでの協議等の経過は、以下の通りである。

平成19年1月11日付 開発行為に関する事前協議申出書の提出。

長野市教育委員会では、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群ニツ宮遺跡」の範囲内に該当しており、近隣における既往調査の成果からも埋蔵文化財包蔵の可能性は高いと判断し、文化財保護法上の手続きと試掘確認調査の実施について回答する。

2月2日付 文化財保護法93条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。

2月20日 遺跡範囲及び保護措置策定のため試掘調査を実施し、遺物包含層の存在を確認する。

事業者との間で記録保存を目的とした発掘調査の実施に関して調整協議を行う。保護措置として、事業面積約1,300㎡のうち開発事業により埋蔵文化財の破壊が懸念される250㎡について発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることとする。

4月9日付 事業者より埋蔵文化財発掘調査依頼書及び土地所有者承諾書を受領する。

4月20日付 有限会社はなのみと長野市との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、調査着手に至る。

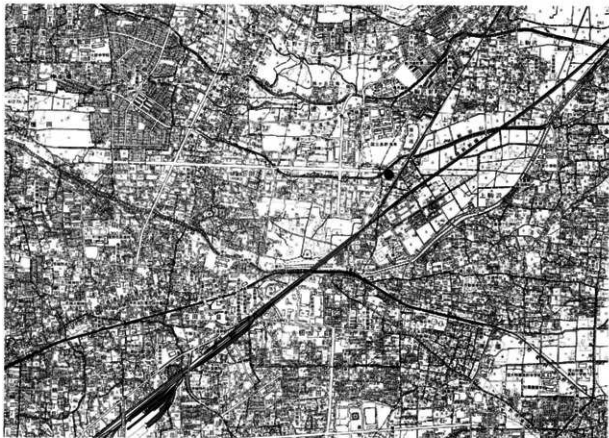


図1 ニツ宮遺跡の位置 (1:50,000)

## 第2節 発掘調査の経過

発掘作業は、委託契約締結後、直ちに着手した。作業の経過は以下の通りである。

- 4月23日 重機による表土除去を開始する。  
調査機器材を搬入。
- 4月24日 作業員による遺構検出作業に着手。  
以降、順次遺構調査を実施する。
- 4月26日 各遺構の掘り下げ作業を完了。  
全体・個別写真真撮影を実施する。
- 4月27日 遺構測量（委託）を実施する。
- 5月1日 測量成果に基づき遺構図を作成。  
調査機器材の撤収。  
現地における全ての作業を完了する。

現地作業終了後、埋蔵文化財センターにおいて順次整理作業を進め、報告書編集作業を継続する中で発掘調査報告書刊行に至る。



表土除去



調査参加者

## 第3節 調査体制

発掘調査委託業務〔委託者〕 有限会社はなのみ 代表取締役 小宮慶洋

発掘調査委託業務〔受託者〕 長野市 長野市長 鷲澤正一

調査主体者	長野市教育委員会教育長	立岩睦秀	
総括管理者	文化財課課長	兩宮一雄	
統括責任者	埋蔵文化財センター所長	青木和明	
庶務担当	係長	宮沢和雄	職員 吉村久江
調査担当	主査	風間栄一	小林和子（調査員・試掘）
	主事	宿野隆史	
	専門員	遠藤恵実子	長瀬 出（調査員） 山野井智子 山岸千晃
			（調査員） 小池勝典 柴田洋孝 向山純子 佐々木麻由子
発掘作業員	上原律江 金子多恵子 倉島邦子 後藤一雄	清水昭光 田村秀之 寺島直利 宮澤周子	
	山口勝己 和田五男		
整理調査員	青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 鳥羽徳子	中殿章子 武藤信子 矢口栄子	
整理作業員	倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 岡崎文子	富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子	

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所

## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

中央高地北部に位置する長野市は、地形的には長野盆地、通称善光寺平と、その東西両縁を画する東部山地並びに西部山地に大別される。長野盆地は千曲川と犀川の合流点を中心に広がる、長さ40km、最大幅10km程の狭長な盆地で、南西-北東方向を長軸とする楕円形もしくは紡錘形を呈する。標高は320~360mと高度差が少なく低平な盆地である。長野盆地を縦貫する千曲川の左岸域には、西部山地を開析して流れ込む支流諸河川、犀川・裾花川・浅川などの地積作用によって扇状地形が発達している。このうち最も北側に位置する浅川扇状地は、飯縄山を水源とする浅川によって形成された中規模扇状地で、浅川東条地帯、通称浅川原口を扇頂に、南は城東町・西和田で裾花川扇状地と、扇端は東方へ伸びて金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地と接する。扇頂側の扇状地面を浅川や駒沢川が開析し、その前面に新たに緩勾配の扇状地を形成するため、扇頂側と扇端側では傾斜が大きく異なる。昭和31年測量の地形図(図2)からは、調査地の西方約350mを境にして等高線の間隔に広狭の差を捉取れる。

二ツ宮遺跡は浅川扇状地の扇端部付近に立地する。調査地北側を新田川(駒沢川旧流路)が、600m南側を浅川が流下しており、標高は現況で約356mを測る。遺跡周辺は近年まで主に畑地や果樹園として地目利用されてきたが、昭和61年に計画された事業面積約45haに及ぶ「長野市福田徳間土地区画整理事業」により大規模造成が為され、現在では整然と区画された住宅地へと姿を変えている。遺跡は扇状地内に形成された微高地上に展開するものと想定されるが、現況では造成区画の高低差でしか旧地形を窺うことはできない。

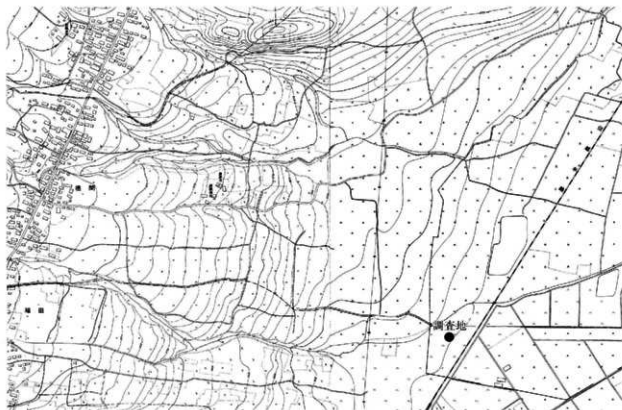


図2 調査地周辺の地形(昭和31年測図 1:10,000)



## 第2節 歴史的環境

### 1. ニツ宮遺跡の調査歴

ニツ宮遺跡ではこれまでに4件の発掘調査が実施されている。今回報告する第5次調査区は、新田川改修事業地点の東端部から東方約50mに位置し、稲田徳間土地区画整理事業地点FM5区の北東端部に隣接する。以下、既往調査の概要を記す。

第1～3次調査(図3-2) 稲田徳間土地区画整理事業並びに準用河川新田川改修事業に伴い、昭和63年度の第1次調査から平成2年度の第3次調査まで発掘調査が継続実施され、竪穴住居跡133軒・溝跡52条・甕棺墓・土坑・小穴多数等から成る弥生時代中期～平安時代の大規模複合集落が確認された。弥生時代は中期後半栗林式期と後期前半を主体とし、後期後半箱清水式期から古墳時代前期にかけての遺構分布は希薄である。後期前半の集落は、出土土器の様相から、「吉田式」土器の標識遺跡である吉田高校グランド遺跡に後続する段階に位置付けられるが、該期集落跡の発掘例は数少なく、吉田式と箱清水式との過渡期における集落展開を考察する上で貴重な資料となろう。また、平安時代では「コ」の字状を呈する区画溝が検出されているが、区画の内外で遺構分布に疎密の差が認められ、区画内が特別な空間であった可能性も考えられる。

特記遺物としては、帰属時期不明の溝跡より7世紀後半の特徴をもつ瓦製鷲尾破片が出土しており、寺院に関連した施設が存在が想定される。稲添遺跡(11)より出土した瓦塔や本堀遺跡(4)出土の布目軒瓦、駒沢新町遺跡(15)出土の阿弥陀三尊懸仏鎧型とともに、この地域の古代仏教文化を窺わせる重要な遺物である。

長野市教委1992「ニツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡」長野市の埋蔵文化財第47集

第4次調査(図3-3) 平成6年度、中部電力吉田柏原線仮設鉄塔建設に伴い実施された発掘調査で、弥生時代後期～古墳時代初期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期～奈良時代の溝跡2条・土坑・井戸状遺構等が検出されている。出土遺物は僅少だが、古墳時代中期～奈良時代の所産とみられるものを主体とする。調査面積約80㎡と極めて限られた調査区ではあるが、隣接する土地区画整理事業地点FM4区における調査結果を補足する成果が得られた。

長野市教委1995「ニツ宮遺跡(2)・吉田町東遺跡」長野市の埋蔵文化財第71集

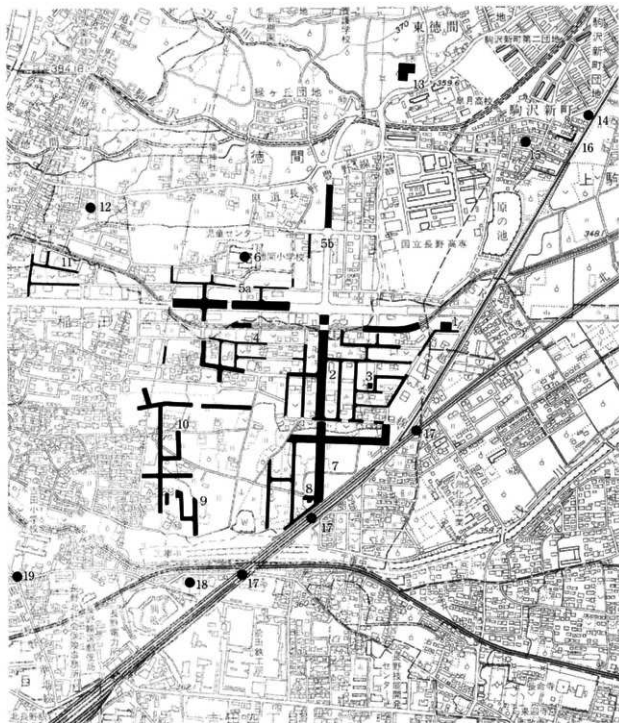
### 2. 周辺の遺跡

千曲川の支流である浅川の堆積作用により形成された扇状地上には、縄文時代前期以降、各時代の集落遺跡が密に分布しており、市内有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。本項では浅川扇状地遺跡群の様相について、ニツ宮遺跡が所在する若槻地区を中心に概観する。

本堀遺跡(図3-4) 稲田徳間土地区画整理事業並びに準用河川新田川改修事業に伴い、昭和63年～平成2年度にかけて発掘調査を実施した。調査区西隣には、字名の由来となった中世居館、本堀氏館跡が所在する。土地区画整理事業地点では弥生中期後半栗林式期の竪穴住居跡3軒・溝跡2条、古墳時代の竪穴住居跡2軒・溝跡1条、帰属時期不明の掘立柱建物跡4棟等が、新田川改修事業地点では縄文時代の陥穴とみられる土坑1基、平安時代の竪穴住居跡1軒・溝跡等が検出されている。

長野市教委1992「ニツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡」長野市の埋蔵文化財第47集

柳田遺跡(図3-5) 昭和63年～平成2年度に発掘調査が実施された。ニツ宮遺跡や本堀遺跡等と同じく稲



1. ニツ宮遺跡 (調査地) 2. ニツ宮遺跡 (稲田徳間土地区画整理地点ほか) 3. ニツ宮遺跡 (中部電力仮設鉄塔建設地点) 4. 本福遺跡 5. 柳田遺跡 6. 徳間柳田遺跡 7. 権現堂遺跡 (稲田南土地区画整理地点)  
 8. 権現堂遺跡 (ぶらっと稲田店建設地点) 9. 桶爪遺跡 10. 天神木遺跡 11. 稲添遺跡 12. 徳間榎田遺跡  
 13. 徳間本堂原遺跡 14. 駒沢祭祀遺跡 15. 駒沢新町遺跡 (長野電鉄宅地造成地点) 16. 駒沢新町遺跡 (長野電鉄上駒沢住宅地(2)造成地点) 17. 浅川扇状地遺跡群 18. 辰巳池遺跡 19. 吉田町東遺跡

図3 周辺の遺跡 (1:10,000)

田徳間土地区画整理事業を起因とし、事業地内の新田川以北を遺跡範囲とする。検出された遺構は、弥生時代中期～平安時代の竪穴住居跡12軒・掘立柱建物跡7棟・溝跡・土坑等である。弥生時代中期～古墳時代の遺構は主に3区(5b)、平安時代の遺構は1・2区(5a)を中心に展開しており、遺構分布などを勘案すれば、1・2区と3区は別遺跡と理解するのが妥当と思われる。

長野市教委1992『二ツ宮遺跡・本堀遺跡・柳田遺跡・稲添遺跡』長野市の埋蔵文化財第47集

徳間柳田遺跡(図3-6) 昭和54年に徳間小学校建設に伴う発掘調査が実施され、弥生中期後半栗林式期～平安時代の竪穴住居跡3軒・溝跡3条・土坑等が確認された。

長野市教委1980『四ツ屋遺跡・徳間遺跡・塩崎遺跡群』長野市の埋蔵文化財第9集

権現堂遺跡 第1次調査(図3-7) 平成12年度、稲田南土地区画整理事業に伴い約5,530㎡を発掘調査した。調査区北側は二ツ宮遺跡土地区画整理事業地点FM6区に接続する。古墳時代前期の竪穴住居跡2軒・溝跡・土坑、古墳時代後期の竪穴住居跡4軒・溝跡、奈良・平安時代の竪穴住居跡1軒・溝跡・井戸跡、中世の溝跡・井戸跡・土坑・小穴群が検出された。古墳時代前期の遺構は調査区北端域に、後期以降は南半部に展開しており、調査区中央付近は遺構分布が希薄である。遺跡は南北に二分でき、北側は二ツ宮遺跡の範疇と理解される。

長野市教委2004『浅川扇状地遺跡群天神木遺跡・桶爪遺跡・権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第104集

第2次調査(図3-8) 平成16年度、民間の開発事業を起因とする発掘調査を実施した。調査面積は約400㎡を測る。浅川氾濫によって埋没した中世の水田跡や畦畔、水田層下の自然流路等を検出したほか、調査区壁面の土層観察では水田面3面及び畦畔が確認された。

長野市教委2005『棚原宮西遺跡・権現堂遺跡(2)・吉田古屋敷遺跡(2)・返目遺跡』長野市の埋蔵文化財第108集

桶爪遺跡(図3-9) 平成11年度に稲田南土地区画整理事業を起因とする発掘調査を実施した。調査面積は約15,000㎡である。弥生時代中期の竪穴住居跡4軒・溝跡・土坑、古墳時代前期の竪穴住居跡4軒・周溝・溝跡・土坑、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒・溝跡・土坑、奈良時代の竪穴住居跡1軒・溝跡が検出された。このうち古墳時代前期の溝跡は2重または3重に巡る「コ」の字状を呈し、溝の内側には小穴群を伴う。外周溝からは高坏や器台等が投棄された状態で出土しており、祭祀遺構の可能性が高いとされる。

長野市教委2004『浅川扇状地遺跡群天神木遺跡・桶爪遺跡・権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第104集

天神木遺跡(図3-10) 平成10年度、稲田南土地区画整理事業に伴い約4,050㎡を発掘調査した。検出された遺構は、弥生時代中期の土坑1基、中世の大溝・井戸跡2基・小穴、縄文時期不明の竪穴状遺構2基・溝跡等である。大溝は最大幅3.6m、深さ0.8mを測り、北西から南東方向へ蛇行する。溝の形態などから流路・排水機能を備えた区画溝と想定されている。

長野市教委2004『浅川扇状地遺跡群天神木遺跡・桶爪遺跡・権現堂遺跡』長野市の埋蔵文化財第104集

#### 参考文献

- 1 『長野縣町村誌 北信篇(復刻版)』1973 名著出版
- 2 『長野県上水内郡誌 歴史編』1976 上水内郡誌編集会
- 3 『長野市誌 第一巻 自然編』1997 長野市
- 4 『長野市誌 第八巻 旧市町村史編』1997 長野市
- 5 『長野市誌 第十二巻 資料編 原始・古代・中世』2003 長野市

### 第三章 調査成果

#### 第1節 調査概要

発掘調査に先立ち、事業予定地内の南北2地点において試掘調査を実施している（図6参照）。確認された基本層序は図4に示した通りである。南側に設定した試掘坑Aでは、第1層：表土（盛土）層、第2層：灰色シルト層、第3層：黒褐色土層、第4層：小礫を多量に含む灰褐色砂質土層となっており、第3層が遺物包含層、第4層上面が遺構確認面に該当する。一方、北側の試掘坑Bは、地表下1.8mまで盛土造成等による攪乱を受けている。湧水等のため掘削は地表下2.0mまでとしたが、遺構確認面は確認されていない。

当該発掘調査は店舗・工場建設事業に伴うもので、事業面積約1,300㎡のうち工事によって埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性がある建物部分250㎡のみを調査対象としたが、調査区北端部は擁壁

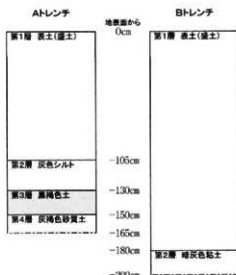


図4 基本土層柱状図



調査地周辺の航空写真（平成2年撮影 ㈱ジャステック）

設置による攪乱を受けており、実質調査面積は180m<sup>2</sup>に留まる。

検出された遺構は溝跡1条、土坑・小穴44基である。遺構の分布は調査区全域に広がるが、散在的で密集度は低い。出土遺物は弥生土器や土師器を主体とするが、破片資料が殆どで出土量も少なく、帰属時期を特定できる遺構は限られる。既往の調査では、調査地南側に隣接する稲田徳間土地区画整理事業地点FM5区において、弥生時代中期栗林式期～後期箱清水式期の竪穴住居跡9軒・土坑、古墳時代中期の竪穴住居跡2軒が発掘されていることから、今次調査では集落範囲の広がりや確認されるものと期待されたが、上記の通り、居住地の展開は認められなかった。調査範囲が狭隘なため断定はできないが、試掘調査の結果や遺構の分布状況等を勘案すると、調査地付近は遺跡の縁辺部にあたると考えられる。

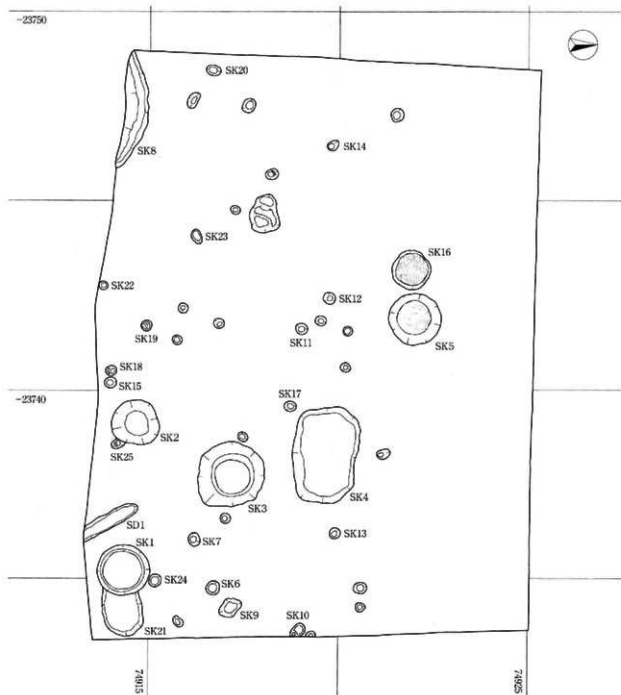


図5 遺構分布図 (1:100)

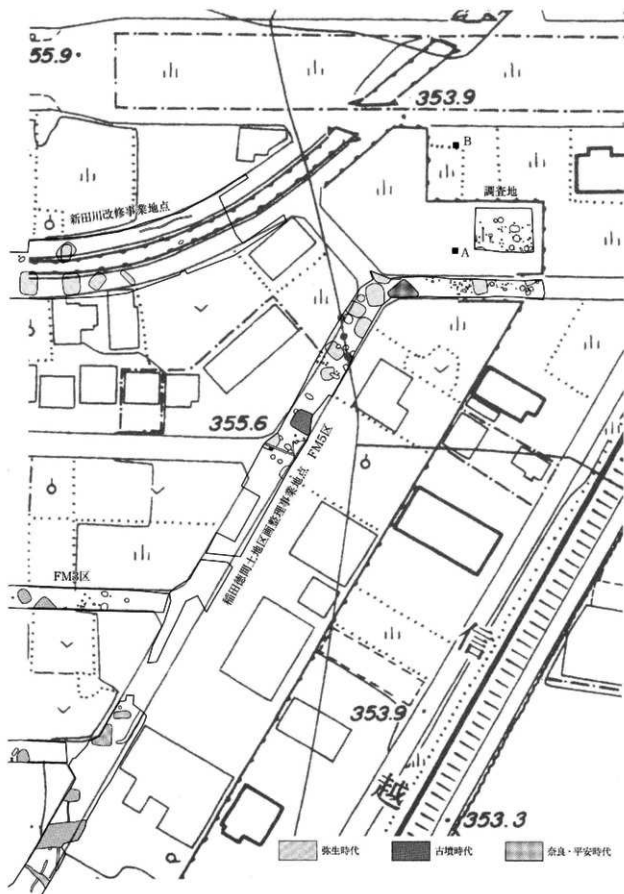


図6 調査区の位置と遺構分布 (1:1,000)

## 溝跡

遺構	時期	平面形	規模 (cm)			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(kg)	備考
			長軸	短軸	深度				
S D 1		レンズ形	—	40	12			0.01	縄文時代など詳細は不明

## 土坑など

遺構	時期	平面形	規模 (cm)			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(kg)	備考
			長軸	短軸	深度				
S K 1		円形	140	132	—	SK21→		0.13	埴輪、底板未検出
S K 2	弥生後期	不整形円形	128	128	64	SK25→	下層より土器片多量出土	2.41	吉田式検出
S K 3		楕円形	188	180	—			0.63	埴輪、底板未検出
S K 4	古墳中期	隅丸長方形	252	174	56			0.69	覆土中に産多量含む
S K 5		円形	138	138	—			0.09	埴輪、底板径約90cm
S K 6		円形	40	34	13			0.03	
S K 7	古墳中期?	楕円形	36	30	18			0.08	
S K 8	弥生中期	—	—	—	—			0.17	大半が調査区外のため詳細不明
S K 9	弥生後期	不整形円形	64	48	13			0.06	
S K 10		楕円形	46	32	30			0.01	
S K 11		円形	32	28	8			0.01	
S K 12		円形	33	30	15			0.01	
S K 13		円形	30	28	12			0.01	
S K 14		楕円形	34	24	22			0.01	
S K 15		楕円形	32	28	32			0.01	
S K 16		円形	104	103	—			0.26	埴輪、底板(径約86cm)のみ検出
S K 17		楕円形	34	26	15			0.02	
S K 18		円形	30	26	22			0.02	
S K 19		円形	29	28	16			0.02	
S K 20		楕円形	38	28	26			0.02	
S K 21		隅丸方形	—	105	47	→SK 1		0.04	
S K 22		円形	23	22	9			0.00	
S K 23		楕円形	40	23	15			0.01	
S K 24		円形	33	32	17			0.02	
S K 25		楕円形	—	27	14	→SK 2		0.00	

表1 遺構一覧表

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 溝跡

#### 1号溝【SD1】(図7)

調査区南東隅より検出された、幅0.4m、深さ12cm程の断面レンズ状を呈する溝跡である。北西から南東方向へと延びるが、部分的な検出に留まるため遺構の全容は明らかでない。遺物は土器片数点が検出されただけで、図示し得るものはなく、具体的な帰属時期は特定できない。

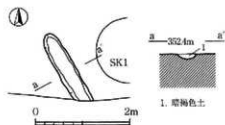


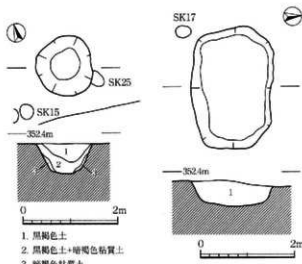
図7 1号溝(1:80)

### 2. 土坑

調査区内では土坑・小穴が44基検出されているが、その配置に規則性や企画性は認められない。遺物を伴うものには遺構番号を付したが、出土遺物は破片資料が大半で、帰属時期を特定できる遺構は僅かである。

#### 2号土坑【SK2】(図8)

調査区南端に位置する土坑で、径1.3m程のやや歪な円形を呈する。遺構確認面からの深さは64cmを測り、覆上下層からは弥生時代後期を主体とする比較的多量の土器片が出土している。このうち壺(図11-1・2・6~8)、高坏(3)、甕(4・9)、土師器壺(5)を図示した。壺1・2は何れも頸部文様帯に歯擦摩状文を施し、1は波状文を、2は鋸歯文を付加する。出土土器の様相から弥生後期前半吉田式期の所産と想定される。



1. 黒褐色土  
2. 黒褐色土+暗褐色粘質土  
3. 暗褐色粘質土

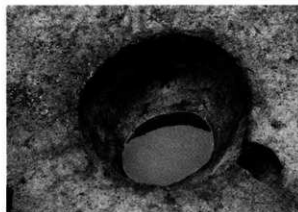
#### 4号土坑【SK4】(図9)

調査区中央付近に位置する土坑で、長軸2.5m、短軸1.7mの隅丸長方形を呈する。遺構確認面からは56cm程掘り込まれ、底面は比較的平坦である。覆土中に

1. 黒褐色土(礫多量含む)

図8 2号土坑(1:80)

図9 4号土坑(1:80)



2号土坑



4号土坑



多量の礫を含む。土師器を中心に少量の土器片が検出されているが、何れも小破片で図示できたのは甕（図11-12・14）と甌（13）3点のみである。出土土器の様相から古墳時代中期の土坑と想定される。

#### 7号土坑【SK7】（図5）

調査区南東隅より検出された、規模0.4×0.3m程の楕円形を呈する小穴で、深さは遺構確認面から18cmを測る。出土遺物は、古墳時代中期に比定される土師器甕の胴部破片など土器片数点が検出されているが、図示し得る資料はない。

#### 8号土坑【SK8】（図10）

調査区南西隅に位置する。北端部分を確認しただけで大半は調査区外に延びるため、平面形態や規模など遺構の詳細は明らかでない。出土遺物は弥生中期後半栗林式とみられる壺（図11-17・19）、甕（16・18）のほか土師器甕（15）などが検出されている。

#### 9号土坑【SK9】（図5）

調査区南東隅付近に位置する。平面形態は規模0.6×0.5m程の不整楕円形で、確認面からの深さは13cmとやや浅めである。出土土器は少なく、図示できたのは弥生土器の甕胴部破片1点（図11-20）のみであるが、その様相から弥生後期箱清水式期の所産と考えられる。

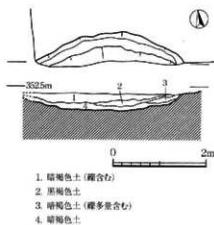


図10 8号土坑（1：80）



8号土坑



調査風景



調査地全景（南東から）



調査地全景（北西から）

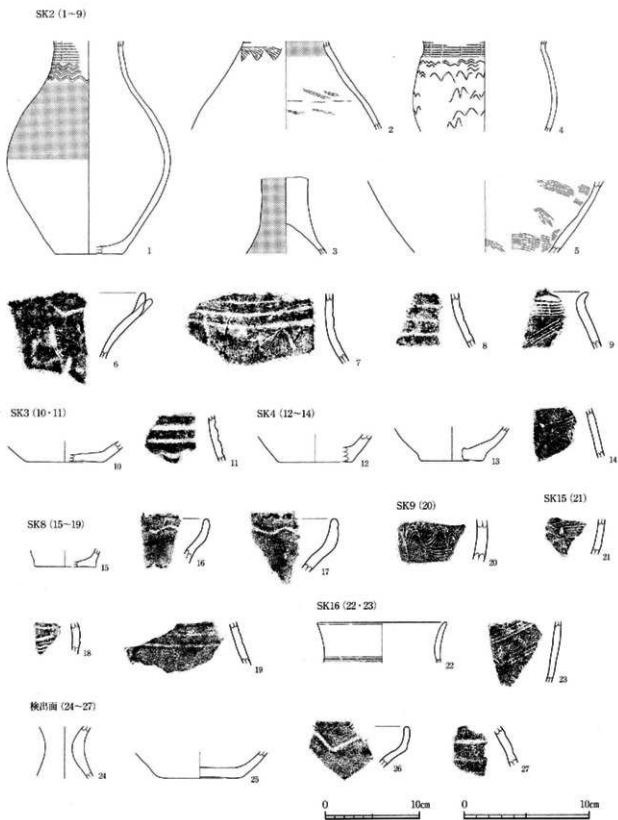


图11 出土土器实测图(1:4)·拓影图(1:3)

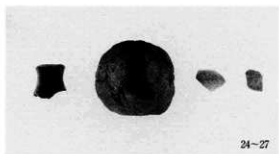
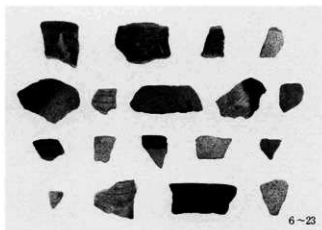
## 第IV章 結 語

二ツ宮遺跡は浅川扇状地の扇端部付近に立地し、浅川左岸の微高地上に広く展開する弥生時代中期～平安時代の集落遺跡である。調査地は東西450m、南北280mに及ぶ遺跡範囲の北東端部にあたる。検出された遺構は、溝跡1条、土坑・小穴44基で、調査区のはほぼ全域に散開する。遺構密度は希薄で、重複関係を有するものは数少ない。また、小穴群の分布に規則性や企画性は認められず、建物跡や柱列等を抽出することは出来なかった。遺物は弥生土器・土師器を主体とするが、出土量は僅少で、破片資料が大半を占める。帰属時期を特定できる遺構は限られるが、出土土器の様相から、弥生時代中期後半栗林式期、後期吉田式・箱清水式期、古墳時代中期の所産と思われる土坑を確認している。

実質調査面積が180㎡と狭隘なため集落構成や変遷等は把握し得ないが、既往調査を含め概観すると、弥生時代の遺構は、調査地に近接する土地区画整理事業地点FM3・5区並びに新田川改修事業地点A区といった遺跡範囲の北東端部に分布が集中する。中期後半及び後期前半を主体とし、続く後期後半から古墳時代前期にかけては遺構分布が希薄となる。古墳時代中期には遺跡南西部と北東端部で集落が形成されるが、竪穴住居跡数十軒から構成される南西部に対して、北東端部では住居跡2軒を検出するに留まるなど、集落規模には較差がみられる。古墳時代後期以降も、集落は遺跡範囲の西半部を中心に展開し、調査地周辺では居住遺構の分布を確認することはできない。

No	種別	器種	層位	法 量 (cm)			遺存度	成 形 ・ 調 整 等	
				口 径	底 径	器 高		外 面	内 面
2号土坑 [SK 2]									
1	弥生	壺	下層	—	(7.3)	—	1/3	縦ミガキ 葉状文・波状文 赤彩	ハケメ→横ミガキ
2	弥生	壺	下層	—	—	—	1/5	葉状文・波状文 赤彩(範囲不明)	ハケメ→ナデ 赤彩
3	弥生	高坏	覆土	—	—	—	3/4	縦ミガキ 赤彩	ナデ
4	弥生	壺	覆土	—	—	—	1/4	葉状文・波状文	ナデ
5	弥生	壺	覆土	—	—	—	1/3	縦ミガキ	ハケメ
3号土坑 [SK 3]									
10	土師	壺	覆土	—	(8.4)	—	1/4	ミガキ	ナデ
4号土坑 [SK 4]									
12	土師	壺	覆土	—	(8.0)	—	1/5	摩耗不明	摩耗不明
13	土師	甗	覆土	—	(6.4)	—	1/4	摩耗不明	摩耗不明
8号土坑 [SK 8]									
15	弥生	壺?	覆土	—	(6.6)	—	1/6	ハケメ	ミガキ
16号土坑 [SK 16]									
2 2	弥生	壺	覆土	(13.4)	—	—	1/5	葉状文	横ミガキ
検 出 画									
24		器台?	覆土	—	—	—	1/3	縦ミガキ	ハケメ→ナデ
25	土師	壺	覆土	—	(9.0)	—	3/4	縦ミガキ	ナデ

表2 出土土器観察表



浅川扇状地遺跡群

# 浅川端遺跡(3)

—吉田2丁目宅地造成 地点—

2008年3月

長野市教育委員会

## 例 言

- 1 本書は、ジェイエイながのサービス株式会社による「(仮称) 吉田2丁目宅地造成工事」に伴い実施された、浅川端遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 調査地は長野市吉田2丁目278-1他に所在する。
- 3 発掘調査は、ジェイエイながのサービス株式会社 代表取締役 馬場司と長野市長 鷲澤正一との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結して実施した。調査業務は長野市教育委員会(埋蔵文化財センター担当)が履行した。
- 4 発掘調査は平成19年6月11日～6月27日までの期間で実施した。調査面積は200㎡である。
- 5 本書の編集及び執筆は長瀬出が担当した。
- 6 遺構写真は長瀬、遺物写真は小池勝典が撮影した。
- 7 出土遺物及び調査の諸記録は、長野市教育委員会埋蔵文化財センターにおいて保管している。なお、遺物注記や諸記録標題としての遺跡略記号は「AKB-IV」を用いた。

## 目 次

### 例言・目次

第I章 調査経過	21	第2節 歴史的環境	24
第1節 調査に至る経過	21	第III章 調査成果	27
第2節 発掘調査の経過	22	第1節 調査概要	27
第3節 調査体制	22	第2節 遺構と遺物	30
第II章 遺跡の立地と環境	23	第IV章 結語	35
第1節 地理的環境	23		

## 図 版 目 次

図1 浅川端遺跡の位置	21	図7 1号溝・土坑	30
図2 調査地周辺の地形	23	図8 出土土器実測図	31
図3 周辺の遺跡	25	図9 出土土器・土製品拓影図	32
図4 遺構分布図	27		
図5 調査区北西壁面土層断面	28	表1 遺構一覧表	29
図6 調査区と既往調査地点	29	表2 出土遺物観察表	34

# 第I章 調査経過

## 第1節 調査に至る経過

当該発掘調査は、長野市吉田2丁目278-1他においてジェイエイながのサービス株式会社が計画した「(仮称)吉田2丁目宅地造成工事」を起因事業とする。発掘調査実施に至るまでの協議等の経過は、以下の通りである。

平成19年3月8日 ジェイエイながのサービス株式会社より埋蔵文化財包蔵地に関する照会がある。

長野市教育委員会では、開発予定地が周知の埋蔵文化財包蔵地である「浅川扇状地遺跡群浅川端遺跡」の範囲内に該当することから、試掘確認調査の実施について回答する。

4月5日 遺跡範囲及び保護措置策定のため試掘調査を実施し、遺物包含層の存在を確認する。

4月24日付 開発行為に関する事前協議申出書の提出。

以降、事業者との間で記録保存を目的とした発掘調査の実施に関して調整協議を行う。保護措置として、事業面積約1,300m<sup>2</sup>のうち掘削等の工事過程により埋蔵文化財の破壊が懸念される道路造成部分200m<sup>2</sup>について発掘調査を実施し、埋蔵文化財の記録保存を図ることとする。

4月27日付 文化財保護法93条の規定に基づく土木工事等のための埋蔵文化財発掘の届出。埋蔵文化財発掘調査依頼書及び土地所有者承諾書を受理する。

6月1日付 ジェイエイながのサービス株式会社と長野市との間で埋蔵文化財発掘調査委託契約を締結し、発掘調査の着手に至る。



図1 浅川端遺跡の位置 (1:25,000)

## 第2節 発掘調査の経過

発掘作業は、委託契約締結後、直ちに着手した。作業の経過は次のとおりである。

- 6月11日 重機による表土除去を開始する。
- 6月13日 試掘時の認識により、調査区南端を除いて遺構検出面が未検出。作業員による遺物包含層除去作業に着手する。  
順次、遺構検出作業及び遺構調査を実施。
- 6月25日 降雨の影響で調査区西壁が崩落する。  
重機を用いて崩土除去を行う。
- 6月26日 各遺構の掘り下げ作業を完了。  
全体・個別写真撮影を実施する。
- 6月27日 遺構測量（委託）を実施する。
- 6月28日 測量成果に基づき遺構図を作成。  
現地における全ての作業を完了する。

現地作業終了後、埋蔵文化財センターにおいて順次整理作業を進め、報告書編集作業を継続する中で発掘調査報告書刊行に至る。



調査風景



調査参加者

## 第3節 調査体制

発掘調査委託業務〔委託者〕 ジェイエイながのサービス株式会社 代表取締役 馬場 司

発掘調査委託業務〔受託者〕 長野市 長野市長 鷲澤正一

調査主体者 長野市教育委員会教育長 立岩睦秀

総括管理者 文化財課課長 雨宮一雄

統括責任者 埋蔵文化財センター所長 青木和明

庶務担当 係長 宮沢和雄 職員 吉村久江

調査担当 主査 風間栄一 小林和子（調査員・試掘）

主事 宿野隆史

専門員 遠藤恵実子 長瀬 出（調査員） 山野井智子 山岸千見  
（調査員） 小池勝典 柴田洋孝 向山純子 佐々木麻由子

発掘作業員 上原律江 金子多恵子 倉島邦子 後藤一雄 塩入洋子 清水昭光 田村秀之 寺島直利  
宮澤周子 山口勝巳 和田五男

整理調査員 青木善子 池田寛子 多羅沢美恵子 鳥羽徳子 中殿章子 武藤信子 矢口栄子

整理作業員 倉島敬子 小泉ひろ美 清水さゆり 関崎文子 富田景子 西尾千枝 三好明子 村松正子

遺構測量委託 株式会社写真測図研究所



## 第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

### 第1節 地理的環境

千曲川の支流である浅川は、飯綱山山腹にある鳴岩湧水を水源とする。灌漑用水池として永禄六年（1563）に築造された大池を通り南流し、真光寺にて同じく飯綱原を水源とする南浅川と合流する。山間部の急傾斜地に深い浸食谷を刻みながら流下した後、浅川東条地帯、通称浅川原口を谷口に長野盆地へ流れ込み、扇状地を形成する。扇頂側では南東に流路を取るが、富竹付近で千曲川左岸の自然堤防に遮られるようにして北東方向へ流れを大きく変えると、途中駒沢川や新田川等を合流しつつ、豊野町にて千曲川へと注ぎ込む。浅川の浸食・堆積作用は護岸整備が進んだ今なお活発で、下流域では天井川を成している。

浅川の流路には幾つもの堰が設けられており、太郎堰・次郎堰・三郎堰といった灌漑用水路は、「恵みの水」として三輪・古田地区をはじめ流域の水田地を潤してきた。一方で、『長野縣町村誌』に「平水微々たりと雖も、霖雨の時は、激水漲溢して、堤防を崩し、大に耕地の暴害を為す」、または「浅川の激湍全村の半を横流して、川敷の地位耕地より高し、故に春秋洪水の都度堤防を崩し、石砂を耕地に押し出し、水害を受けること毎年にして（後略）」とあるように、浅川は決壊・氾濫を繰り返し、流域に甚大な被害を与えた「荒れ川」でもある。

浅川端遺跡は浅川扇状地の扇頂に程近い扇中部に立地し、調査地の北側約60mを浅川が南東方向へ流れる。周辺地形を概観すると、北西から南東方向へ緩やかな傾斜が認められる。標高は現況で約403mを測る。遺跡周辺は水田や桑畑として地目利用されていたが、近年、長野市北部を東西に貫通する都市計画道路北部幹線の開通や、「長野市檀田土地区画整理事業」など大規模な造成事業により商業地化・住宅地化が著しい。

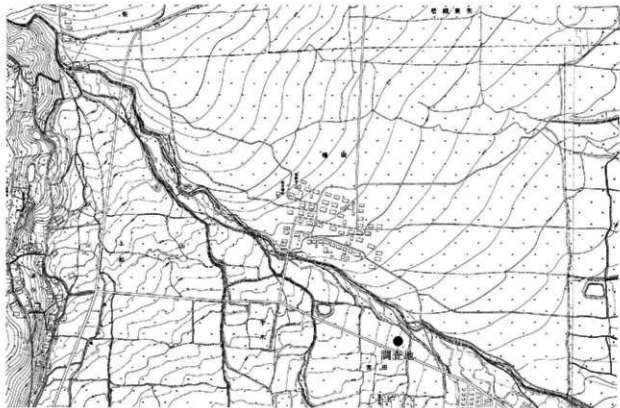


図2 調査地周辺の地形（昭和31年測図 1：10,000）

## 第2節 歴史的環境

### 1. 浅川端遺跡の調査歴

浅川端遺跡ではこれまでに3件の発掘調査が実施されている。本書で報告する第4次調査区は、東西に長く延びた第2次調査区の東端部から南東へ約126m、第3次調査区からは南東約45mの地点に所在する（図6参照）。以下、既往調査の概要を記す。

**第1次調査**（図3-2）昭和62年度、檀田団地造成事業に伴い、開発地内の道路敷設部分630㎡を対象に発掘調査を実施した。縄文時代前期前葉岡山式期の竪穴住居跡1軒・土坑、弥生時代中期の竪穴住居跡3軒・溝跡・土器集中、弥生時代後期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期住居跡11軒、奈良時代住居跡2軒・掘立柱建物跡3棟、平安時代の土坑を検出した。浅川扇状地遺跡群において縄文時代前期の遺構が確認されたのは、本遺跡を含めても未だ3遺跡に限られ、当該期における浅川扇状地の様相を考察する上で貴重な資料を提示している。

長野市教委1988「浅川端遺跡」長野市の埋蔵文化財第29集

**第2次調査**（図3-3）平成13～14年度にかけて、都市計画道北郡幹線道路改良工事に伴い発掘調査が実施された。調査面積は1次調査面3,620㎡、2次調査面1,550㎡を測る。現在、整理作業中のため正確な数字は挙げられないが、主な遺構として、弥生時代後期の竪穴住居跡11軒・円形周溝墓1基・土器墓1基、古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の竪穴住居跡40軒前後、奈良・平安時代住居跡10数軒・掘立柱建物跡3棟等が検出されている。遺構は複雑に切り合いながら密に分布しており、特に古墳時代後期の遺構が集中する調査区中央付近ではその傾向が強い。

出土遺物は多量の土器のほか、石鏃・管玉・勾玉・ガラス玉・金属製品等が検出されている。特筆すべきは青銅製馬形帯鉤の出土で、出土状況の判明している事例としては国内初となる。各部位の表現や特徴が、2世紀後半代に比定される韓国清堂洞5号墓の出土資料に近似しており、木島平村根塚遺跡出土の「渦巻文裝飾付鉄鉤」とともに、北信地方と朝鮮半島との交流を窺わせる貴重な遺物である。なお、馬形帯鉤は古墳後期住居跡の覆土最上層より出土しているが、土層観察にて帯鉤下の土は流入土であることが確認されている。本来の帰属遺構は特定されていない。

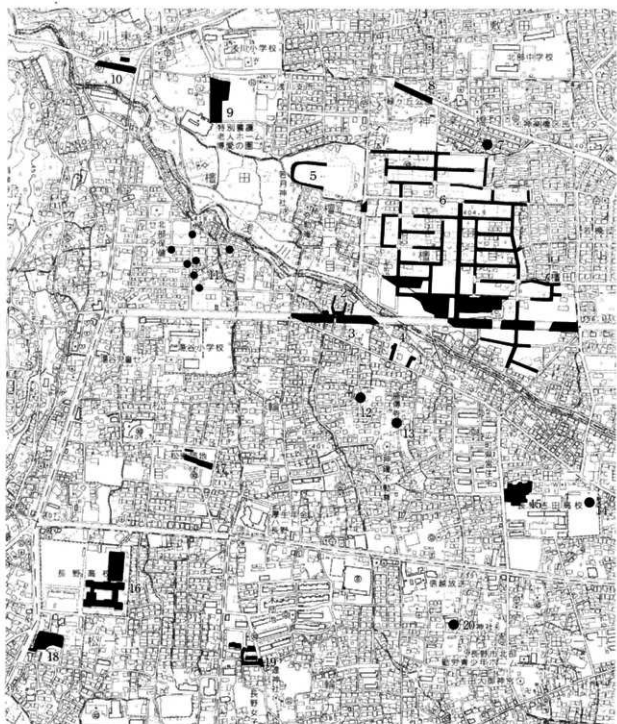
長野市埋文センター2002・2003「所報」№13・14

**第3次調査**（図3-4）民間の宅地造成事業を起因として、平成14年度に約250㎡を発掘調査した。古墳時代中期の竪穴住居跡1軒、古墳時代後期の性格不明遺構、古墳時代末～奈良時代初頭の竪穴住居跡1軒、平安時代の溝跡3条、稲属時期不明の小穴群等が検出されている。第1・2次調査区とは異なり、遺構の分布は希薄で重複関係もあまりみられないことから、調査地付近は遺跡の縁辺部にあたるものと考えられる。古墳中期住居跡からはフイゴの羽口に転用したとみられる高坏脚部が出土しており、初期鍛冶関連遺構の存在が想定される。

長野市教委2003「浅川端遺跡(2)・差出遺跡・三合塚西古墳・石川条里遺跡(10)」長野市の埋蔵文化財第102集

### 2. 周辺の遺跡

浅川扇状地は飯縄山を水源とする浅川の堆積作用によって形成された中規模扇状地で、「浅川原口」を扇頂に、南は城東町・西和田で裾花川扇状地と、扇端は金箱・富竹付近で千曲川氾濫原の後背湿地と接する。この浅川扇状地上には、各時代の集落遺跡が数多く分布しており、市内有数の規模を誇る「浅川扇状地遺跡群」として把握されている。以下、浅川端遺跡周辺の発掘事例を概観し、浅川扇状地遺跡群の考古学的環境とする。



1. 浅川端遺跡 (調査地)
2. 浅川端遺跡 (檀田田地造成地点)
3. 浅川端遺跡 (北部幹線道路改良地点)
4. 浅川端遺跡 (小山水村宅地造成地点)
5. 檀田遺跡 (北長野ゴルフセンター地点)
6. 檀田遺跡 (檀田土地区画整理地点ほか)
7. 神楽橋遺跡 (日本商業史研究所調査地点)
8. 神楽橋遺跡 (浅川若槻線道路改良地点)
9. 松ノ木田遺跡 (長野高校第2グラウンド地点)
10. 松ノ木田遺跡 (飯綱高原浅川線道路改良地点ほか)
11. 湯谷東古墳群
12. 押鐘遺跡
13. 押鐘城跡
14. 長野吉田高校グラウンド遺跡 (都市計画南北部都市下水路地点)
15. 長野吉田高校グラウンド遺跡 (長野吉田高校体育館地点・サッカーグラウンド地点)
16. 本村東沖遺跡 (長野高校地点)
17. 本村東沖遺跡 (上松東団地地点)
18. 本村東沖遺跡 (サーパス上松地点)
19. 下宇木遺跡
20. 盛伝寺居館跡

図3 周辺の遺跡 (1 : 10,000)

**檀田遺跡 第1次調査** (図3-5) 民間開発事業を起因として、平成2年度に発掘調査を実施した。フェンス支柱埋設部分16ヶ所、計360mを調査対象とする試掘的調査ではあるが、古墳時代中期の溝跡1条、古墳時代後期の堅穴住居跡2軒、平安時代の堅穴住居跡4軒、帰属時期不明の堅穴住居跡5軒・溝跡等を確認している。

長野市教委1991『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集

**第2～7次調査** (図3-6) 平成9～14年度にかけて、檀田土地区画整理事業に伴い継続実施された発掘調査で、総事業面積約23haのうち街路部分約45,400mを調査対象とした。縄文時代中期から中世にかけての大規模複合集落で、浅川端遺跡とは浅川を挟んで対岸に立地する。主な遺構として、縄文時代中期の堅穴住居跡・環列土坑群・埋壙遺構、弥生中期後半果林式期の堅穴住居跡約38軒・竪穴木棺墓群、弥生時代後期～古墳時代前期の堅穴住居跡約31軒・円形・方形周溝墓群・前方後方形周溝墓1基・土壇墓・土器棺墓・溝跡、古墳時代後期～奈良時代の堅穴住居跡約54軒等が検出されている。このうち、溝幅を含めた長軸が約30mを測る古墳時代前期の前方後方形周溝墓は、長野盆地のみならず千曲川流域においても最大規模を誇る。

特記遺物としては、縄文中期住居跡よりコハク玉とともに有脚立体土鍋が検出され、乳房の表現や腹部の膨らみなどから妊婦像と推測される。また、箱清水式期の円形周溝墓主体部からは帯状円環形銅鋼と鉄鋼が重なるように出土しているが、被葬者の腕に銅鋼と鉄鋼を同時装着した、極めて稀有な事例である。

**第8・9次調査** (図3-6) 土地区画整理事業地内で計画された民間開発事業2件を起因として、平成14～15年度にかけて発掘調査を実施した。調査面積は計9,455mを測る。縄文時代中期の堅穴住居跡7軒・埋壙遺構2基・ストーンサークル状集石遺構・溝跡・土坑、弥生時代中期住居跡12軒、弥生時代後期住居跡34軒、古墳時代後期の堅穴住居跡46軒・溝跡・土坑等を検出した。土地区画整理事業地点と併せて、長野盆地内では数少ない縄文中期集落の面的調査を実施できたことは、当該期における集落構成等を考察する上で貴重な資料の蓄積となった。

長野市埋文センター1998～2004『所報』No.9～15

**押鐘遺跡** (図3-12) 民間の宅地造成事業を起因として、平成2年度に約330mを発掘調査した。浅川端遺跡の南西約120mに位置する。調査の結果、弥生時代後期後半箱清水式期とみられる土坑1基、平安時代の堅穴住居跡1軒・溝跡・土坑等が検出された。浅川右岸に広く展開する浅川端集落の南限にあたるものと想定される。

長野市教委1991『中俣遺跡・押鐘遺跡・檀田遺跡』長野市の埋蔵文化財第41集

**湯谷東古墳群** (図3-11) 昭和48年度、湯谷東土地区画整理事業に基づく工事中に確認された、円墳7基から構成される古墳群である。墳丘を確認できたのは1号墳のみで、4号墳は自動車搬入路開削の際に湮滅し、他の5基も水田造成時に削平されている。1号墳は、積石塚を思わせる中小礫の葺石で墳丘が覆われ、主体部には全長9.3mを測る比較的大規模な横穴式石室が用いられる。出土遺物の様相から、6世紀末頃に築造され、7～8世紀初頭まで追葬が行われていたものと想定される。現在、2号墳のみ公園地に保存されている。

長野市教委1981『湯谷古墳群・長礼山古墳群・駒沢新町遺跡』長野市の埋蔵文化財第10集

## 参考文献

- 1 『長野縣町村誌 北信篇 (復刻版)』1973 名著出版
- 2 『長野県上水内部誌 歴史編』1976 上水内部誌編集会
- 3 『長野市誌 第一巻 自然編』1997 長野市
- 4 『長野市誌 第八巻 旧市町村史編』1997 長野市
- 5 『長野市誌 第十二巻 資料編 原始・古代・中世』2003 長野市

## 第三章 調査成果

### 第1節 調査概要

当該発掘調査は宅地造成事業に伴うもので、事業面積約1,300㎡のうち工事によって埋蔵文化財に破壊の及ぶ可能性がある道路敷設部分を調査対象範囲とした。そのため調査区は幅6m、延長32mと狭長で、調査面積も約200㎡に留まる。

発掘調査に先立ち、事業予定地内の北側1地点において試掘調査を実施している。確認された基本層序は、第1層：表土（盛土）層、第2層：暗褐色粘土層、第3層：灰褐色粘土層、第4層：暗褐色土層、第5層：灰褐色砂層となっており、第2層及び第4層が遺物包含層に、また、地表下1.6mに位置する第5層上面が遺構確認面に該当するとの所見が得られた。

しかしながら、重機による表土除去の後、遺構検出作業を開始したところ、試掘調査で地山層とされた第5層は浅川の氾濫堆積による砂礫層で、調査区南端を除いて遺構確認面が未検出であることが判明した。改めて遺物包含層等の除去作業に着手するが、調査地北側では地表下約2.5mまで掘り下げたものの、確認面には到達しなかった。これ以上掘り下げても工事による影響は受けないとの判断から、現状で保護することとしたため、遺構確認面を露呈できたのは調査区南端から約9mまでの範囲で、それより北側は遺物包含層や氾濫砂層に被われたままである。調査区の地形を概観すると、確認できた範囲での遺構確認面の比高差は1.1mを測り、調査区の60m北側を東流する浅川に向かって大きく傾斜する様が看取される。

検出された遺構は、僅かに溝跡1条、小穴3基を数えるに留まり、その分布は調査区南端に限定される。小穴3基は直線的に配置され、柱列の可能性が想定されるが、部分的な検出のため詳細は明らかでない。出土遺物は弥生土器や土師器を中心に多量検出されているが、大半は遺物包含層からの出土で、遺構に伴う資料は殆どない。なお、45m西側に位置する第3次調査地点では、古墳時代～平安時代の集落跡が発掘されている。今回の調査では、明確に帰属時期を特定できる遺構は検出されていないが、浅川端集落の縁辺部にあたるものと考えられる。

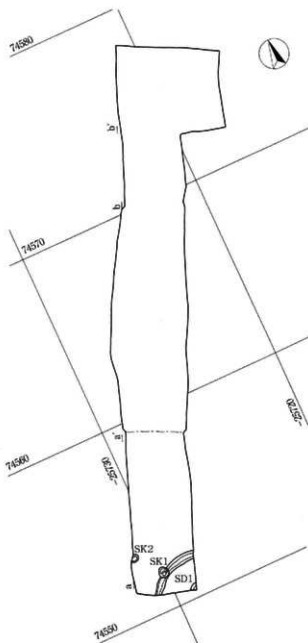


図4 遺構分布図（1：200）

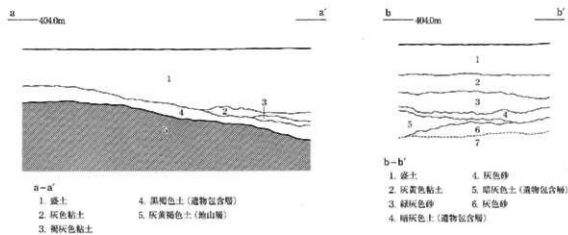


図5 調査区北西壁面土層断面 (1:100)



調査地周辺の航空写真 (平成2年撮影 ㈱ジャステック)

清跡

遺構名	時期	断面形	規模			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(g)	備考
			長(m)	幅(cm)	深(cm)				
SD1		U字形	—	40	32	→SK1	出土遺物なし	—	

土坑など

遺構	時期	平面形	規模 (cm)			重複関係	遺物出土状況	出土総重量(g)	備考
			長軸	短軸	深度				
SK1		楕円形	58	52	36	SD1→	0.01	掘立住地物の柱穴か？	
SK2		楕円形	46	36	14		—	SK1に同じ	
SK3		—	—	—	—		—	SK1に同じ	

表1 遺構一覧表

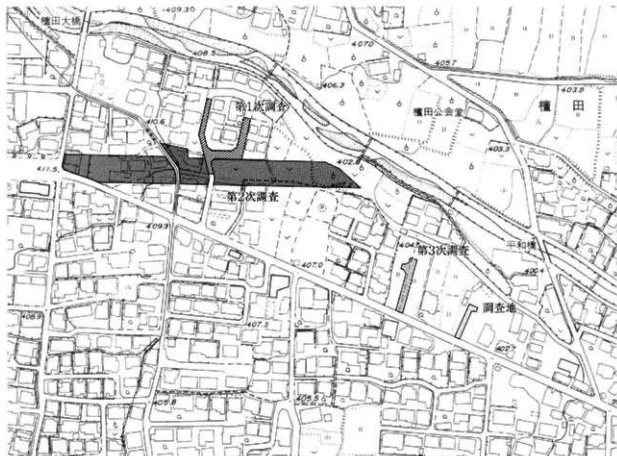


図6 調査区と既往調査地点 (1:3,000)

## 第2節 遺構と遺物

### 1. 溝跡

#### 1号溝【SD1】(図7)

調査区南端より検出された、幅0.4m、深さ32cm程の断面U字形を呈する溝跡である。調査区南東隅を中心に弧を描くが、部分的な検出に留まるため遺構の全容は明らかでない。出土遺物は検出されず、具体的な帰属時期は特定できない。

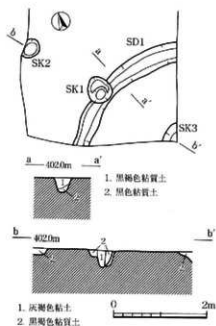


図7 1号溝・土坑 (1:80)

### 2. 土坑

#### 1・2・3号土坑【SK1・2・3】(図7)

調査区南端より小穴3基が検出されている。ほぼ等間隔、かつ直線的に配置されていることから、北西-南東方向を主軸とする掘立柱建物の柱列と考えられるが、極めて部分的な検出に留まるため、平面形や規模など詳細は明らかでない。なお、1号土坑の土層断面観察では柱痕が確認されている。遺物は1号土坑より土師器小片2点が出土しているだけで、具体的な帰属時期の特定には至らなかった。



1号溝



調査区南端



調査風景



遺構測量



### 3. 出土遺物

#### 土器 (図8・9)

今回の調査では、縄文時代から平安時代まで各時代にわたる土器が多量に出土している。調査地全域での土器総量は約22.3kgを量るが、遺構に伴う資料は皆無に等しく、僅かに1号土坑から土師器小片2点が検出されたに過ぎない。出土土器の大半は遺物包含層からの検出で、氾濫堆積による砂層からの出土は僅少である。出土土器全体を瞥見すると、既往の第1～3次調査で主体となった古墳時代後期の資料はあまりみられず、弥生時代中期～古墳時代前期、なかでも弥生時代後期後半箱清水式土器の出土が顕著である。また、図8-4・5など北陸系とみられる土器も少量ではあるが出土している。縄文土器は中期後半の所産と思われる破片資料2点(図9-1・2)を確認したが、ともに小片のため全体の器形や文様構成などを復原することは難しい。須恵器も数点検出されているが、図化できたのは坏蓋・有台坏(図8-13・14)のみである。

#### 土製品 (図9-32)

土製円板1点が遺物包含層より検出されている。波状文が施された土器片を再加工したもので、打ち欠き部分の擦り磨きや穿孔は認められない。

#### 包含層

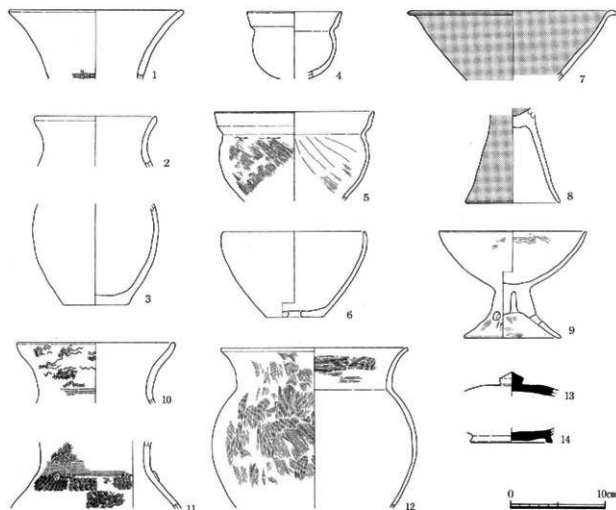


図8 出土土器実測図(1:4)

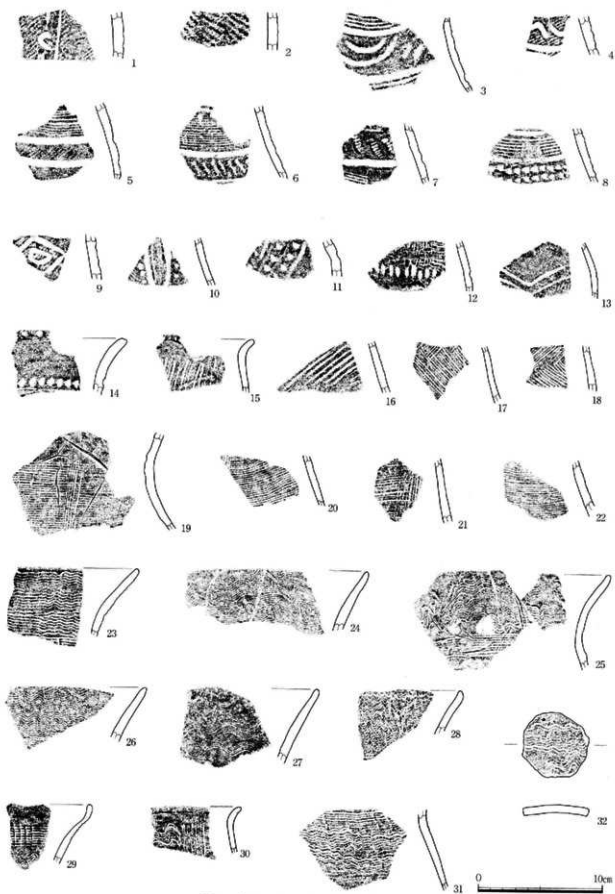
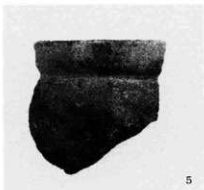
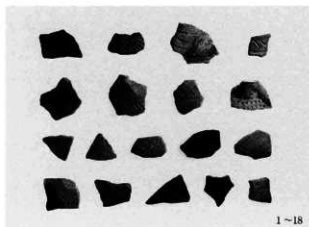
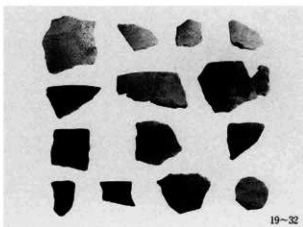


图9 出土土器·土製品拓影图 (1 : 3)





1-18



19-32

## 土器

No	種別	器種	法 量 (cm)			遺存度	成 形 ・ 調 整 等	
			口 径	底 径	器 高		外 面	内 面
包 含 層								
1	弥生	壺	(18.6)	—	—	1/5	縦ミガキ・ナデ T字文	横ミガキ
2	弥生	壺	(13.0)	—	—	1/3	縦ミガキ・ナデ	ナデ
3	弥生	壺	—	7.0	—	1/4	縦ミガキ	横ミガキ
4	土師	鉢	(10.0)	—	(7.1)	1/3	摩耗不明	摩耗不明
5	土師	鉢	(16.8)	—	—	1/5	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ
6	弥生	瓶	(14.8)	6.0	9.1	2/5	縦・横ミガキ 底部：ケズリ	横ミガキ
7	弥生	高坏	(22.2)	—	—	1/5	横ミガキ 赤彩	横・斜ミガキ 赤彩
8	弥生	高坏	—	(10.0)	—	2/3	縦ミガキ 赤彩	坏部：ミガキ 赤彩 脚部：ナデ
9	土師	高坏	15.6	(10.2)	11.3	2/3	坏部：ハケメ→縦ミガキ 脚部：ハケメ→縦・横ミガキ 円形透孔3	坏部：ハケメ→横ミガキ 脚部：ハケメ
10	弥生	甕	(16.8)	—	—	1/4	縞状文・波状文	横ミガキ
11	弥生	甕	—	—	—	1/3	縞状文→波状文 (下→上) 円形浮文	ハケメ→横ミガキ
12	土師	甕	19.7	—	—	1/2	ハケメ	ハケメ
13	須恵	坏蓋	—	—	—	1/6	回転ナデ 天井部：回転ヘラケズリ 宝珠形つまみ	回転ナデ
14	須恵	有台坏	—	(8.6)	—	2/5	回転ナデ 底部：回転ヘラケズリ	回転ナデ

## 土製品

No	種 別	法 量 (cm)	出土遺構	遺存度	形 態 ・ 調 整 等
1	土製円板	径5.2	包含層	完形	土器片(裏) 転用 穿孔なし 外面：波状文 内面：ナデ

表2 出土遺物観察表

## 第IV章 結 語

浅川端遺跡は浅川扇状地の扇央部付近に立地する集落遺跡で、浅川右岸の微高地上、東西約350mの範囲に展開する。既往調査では、第3次調査区付近が遺跡範囲の東端部と想定されているが、今回調査を実施した地点は更に45m東側に所在する。第3次調査区より東への遺構の大規模な展開はみられないとする前回調査時の所見通り、今次調査では埴塚時期不明の溝跡1条・小穴3基を確認しただけで、その分布は調査区南端に限定される。小穴は直線的に配置され、うち1基からは柱痕を確認した。柱列の可能性が想定されるものの、部分的な検出に過ぎず詳細は明らかでない。遺物は縄文時代前期から平安時代に至る各時代の土器が多量に検出されたが、1号土坑に伴う土師器の小片2点を例外として、何れも遺物包含層からの出土である。出土土器は、第1～3次調査で主体となった古墳時代後期ではなく、弥生時代中期～古墳時代前期の資料が大半を占める。

調査区延長32mのうち、遺構確認面を露呈できたのは南端部約9mの範囲に留まる。北半部では地表下約2.5mまで掘り下げたが、確認面には到達していない。遺構確認面の比高差は確認された範囲で1.1mを測り、60m北側を流れる浅川に向かって地形が大きく傾斜することが分かる。近接する第3次調査区内では同様の傾向は認められず、調査地付近が微高地から浅川流路への地形の転換部に該当するものと思われる。なお、浅川は大雨の度に決壊や氾濫を繰り返したことが記録に残されているが、調査区壁面の土層観察でも氾濫堆積による砂礫層を少なくとも3層確認している。

### 報告書抄録

ふりがな	あさかわせんじょうちいせきぐん ふたつみやいせき(3)・あさかわばたいせき(3)							
書名	浅川扇状地遺跡群 ニツ宮遺跡(3)・浅川端遺跡(3)							
副書名	はなのみ本社工場建設地点・吉田2丁目宅地造成地点							
シリーズ名	長野市の埋蔵文化財							
シリーズ番号	第122集							
編著者名	長瀬 出							
編集機関	長野市教育委員会文化財課埋蔵文化財センター							
所在地	〒381-2212 長野県長野市小島田町1414番地 TEL 026-284-0004・FAX 026-284-0106							
発行年月日	2008(平成20)年3月1日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 °' "	東経 °' "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ニツ宮遺跡	長野県長野市稲田 3丁目1841	20201	A-080	36° 40' 29"	138° 14' 2"	20070423 ～ 20070501	250㎡	店舗建設
浅川端遺跡	長野県長野市吉田 2丁目278-1他	20201	A-062	36° 40' 30"	138° 12' 33"	20070611 ～ 20070627	200㎡	宅地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ニツ宮遺跡	集落	弥生中期 弥生後期 古墳中期	溝 1 土坑・小穴 44	弥生土器・土師器				
浅川端遺跡	集落	弥生後期 古墳前期	溝 1 小穴 3	縄文土器・弥生土器 土師器・須恵器・土製品				
要約	ニツ宮遺跡は浅川扇状地扇端部に立地する、弥生時代中期から平安時代にかけての大規模複合集落であるが、今回の調査では溝・土坑・小穴が検出されただけで、住居跡等の分布は認められなかった。調査地は遺跡範囲の縁辺部に該当するものと思われる。							
	浅川端遺跡は浅川扇状地扇尖部に立地する集落遺跡で、既往の調査では縄文後期・弥生中期・弥生後期・古墳後期～平安時代の遺構が数多く確認されている。今回の調査では溝・小穴を検出しているが、遺物を伴わないため具体的な帰属時期は明らかでない。調査区壁面の土層観察にて、浅川の氾濫堆積による砂礫層を確認した。							

長野市の埋蔵文化財第122集

浅川扇状地遺跡群

二ツ宮遺跡(3)

浅川端遺跡(3)

平成20年3月14日 印刷

平成20年3月21日 発行

編集 長野市教育委員会  
発行 文化財課埋蔵文化財センター  
印刷 ほおずき書籍株式会社